

# 東京大学教養学部自然科学博物館の 半世紀

萩谷 宏

東京都市大学・知識工学部・自然科学科

▶ TOPページ

▶ 展覧会

▶ 資料室

▶ 利用案内

▶ 美術博物館の沿革

▶ 自然科学博物館の沿革

▶ 過去の展覧会

▶ 刊行物

▶ デジタルアーカイブ

▶ 問い合わせ先

▶ English

## LINK

▶ オルガン委員会

▶ ピアノ委員会

▶ 大学院総合文化研究科教養学部



## 自然科学博物館の沿革

自然科学博物館は、教養学部での一般教育に資することを目的として、1953(昭和28)年に設置されました。東京大学総合文化研究科の自然科学系の教官をメンバーとする自然科学博物館委員会(準備委員会は1952(昭和27)年4月発足)によって運営されています。

旧制第一高等学校時代から引き継がれた、西洋科学や工学の導入期に用いられた実験器具、計測器具、機械などの教育標本をはじめ、鉱物、岩石、化石、動・植物(蝶、キノコ中心)など、優に1万点を超える標本資料を所蔵しています。このほか、火山活動に関する映像資料なども保管しています。

標本のうち、生物学関連では、日本の蝶類標本、化学関連では、DNA等分子模型などがあります。

1983年三宅島噴火の関連資料は、学内特定研究費や学部特別経費等の援助もあり、わが国最高の質と量を誇るもので、時に応じて研究・教育の両面に役立っていました。

自然科学、工学の諸分野にわたるこれらの標本は、公開講座で、博物館を使った授業も行うなど学生教育に活用されています。

近年では夏期に、自然科学博物館主催の夏休み企画の特別展を開催しています。1階展示室を使用しておこなうこの企画は、お子様から幅広い年齢層の方に、ご来場いただいています。

## 自然科学博物館所蔵資料



理化学実験機器



骨格標本



図学教材

# 自然科学博物館の歴史（要約）

- 1949 旧制第一高等学校と東京高等学校を母体に、新制東京大学教養学部がスタート
- 1952 自然科学博物館準備委員会が発足
- 1953 自然科学博物館委員会が設置
- 1978 1号館時計台下に展示スペースを確保
- 2003 美術博物館と合同で駒場博物館を組織し、改築した旧図書館（教務課・美術博物館として長く使用）に移転。

発足後25年後に展示室を得て、50年後に建物を得た。

# 特徴

- 旧制一高時代からの標本（一部）、掛図、理化学器械などと、新制大学移行時の購入標本を基本に、教員・学生が集めた資料を追加
- 野外での実習、講演会、見学会などの行事を主催
- 教養学部地学見学旅行とのリンク
- 地学教室の教員が主導したが、生物学・図学などの教員が参加。
- 学生の自主的なサークルが複数存在し、活動を支えた
- 当初、展示室はおろか収蔵スペースもない「仮想博物館」状態であった　－教員の「自然科学博物館委員会」が運営
- 収蔵標本の選定には教育目的が強く意識されていた
- 90年代に入ると活動の停滞が目立つ

-----

「教養学部報」の記事から当時の様子を追う　↓

# 自然科学

## 博物館の構想

片山 信夫

「これ は句になる！」と思つ

たのだが、どうも花の名がわからない。「名もなき花」では句にも歌にもならない。という時には、博物館の一隅の腊葉等を思い出して下さい。そこには日本に見られる草花のほとんど完全な標本が揃っています。それに季節のものごしたら、鉢植えの標本もごきりだけ集めてあります。何年か先、自然科学博物館が完成したときにはこのような案内状も書いてみたいと思う。

この夏山を歩いて驚いたことは、どんな山奥に行つても、ミニールのあるしきが女の手に抱かれてゐることである。これと同じような驚きが、人絹やスフについて語られたのは、つい先ごろのことであつたが、今日では化学繊維工業はその生産力でも、その製品の品質でも、全く天然繊維工業と同等の

示会を開く段取りになつてい。る

しか し重工業方面になると現場から離れた、小さな展示では実感も出ないし、理解も困難である。これはむしろ直接工場へ見学に行くに限る。まずその手始めとして、十一月ごろの秋晴れの日を選んで、浦賀ドックの造船所の見学会を催したいと思つてゐる。

日本で科学博物館といえば、上野のあれが代表者であるが、あれは義務教育の水准をわらつた教育博物館であつて、もちろん数養学部

に身につくことが

陳列 は一つを半永久的放置しとせせず、十分陳たと思われれるものいテーマの陳列にして陳列替えの列のテーマに關し、部外から専門をわかりうこととする。経費の比較的かたは、講演会なな、会や見学会以外、自分の間講演会こととなる。

講演会といつ聴くというだけ演題に關係したなるべく豊富にして展示することては聴覚よりも学映画を利用すは当学部として、主として講甘え、差支えのそのまき寄贈し來の準備として考をである。寸暇を利用

いたるまで学生生活の中心となり、その創造性を養うところになつてはならない。小学校や中学校においては人間の創造性と結ぶべきである。それは直ちに人間の創造性と結ぶべきである。高校における教育効果は専ら授けられてくる問題だ。ただ、高

# 野外実習の妙味

(地学のゼミナール)

片山 信夫



で、地学の予備知識を全然持たずにゼミに申し込む人もあった。これはお断りしている。ゼミ以上の、初歩知識の手ほどきをする余裕はないからである。

サイクリングクラブの連中、往復にサイクリングを楽しんがたし、自動車でドライブとした学生もあつた。しかし、現着いてからは、みな一様に足りに調べていくのである。自

や自動車で近付けるところにわれわれが調べようと思つたなかなか見つからぬのが常で、夏の暑さになつたとき、

い谷川を徒渉すると、重心に於てはしやきたくなるが、またの裏のごみ捨て場をかき分け、ほしげにうろろろするとき、何のためにこんな臭い思ひをすればならないのかと、ついでに、つぼくなる。しかし、お弁当は、なるべく気持のよい場所、ゆつくりと食べるようにして、何といつても、これがいちばん、楽しみだから。

その ようにして、何 ようというのか、口にいえば、与えられた地域史を、自分自身で観察し、考

**馴れ** るということば、恐ろしいもので、学生諸君の多くも、講義また講義の大学教育を、別に不思議とも思わずに受け入れているのではないかとと思われる。一方通行の講義だけを通して接する教官は無味乾燥であつても、机を囲んで議論したり、い

ら、はぐまれていくべきものだら、と思うが、巨大化してしまつた駒場の教養学部の現状では、学部の名にふさわしい教育の場を作ることは、所詮無理といわざるを得ない。しかし、あきらめてしまふはそれまでである。あきらめる前にこれぞと思ふ先生のゼミの門をたたきたまえ。講義だけでは求められなかつた何かを得られるに違いない。

わたくしは、ゼミのやり方に就いては、ま

**わた**

くしのゼミは地学の野外実習ということ



岩壁に囲まれて、めいめいに思索しているゼミの連中(桂川上流にて)

きる適当な実習地を選び一学期中に四・五回出かけて、その結果を簡単なレポートにまとめるのが仕事である。いままでに選んだ場所は飯能付近、桂川流域、大磯海岸など、いづれもハイキングには恰好のところである。

そこで、無料案内者つきのハイキングにでも参加するつもり

# 友交いし樂

## 石くれ会のこと —片山信夫—

境は、簡単には見出し難いものである。教養学部としての交友関係であるからには、教養学部を離れてからも、その関係を通じて教養学部をなつかしみ、愛するようなものでありたい。その意味では現在のクラスのような組織には、あまり期待できないであろう。校友会の部はもちろんであるが、ゼミもその条件によつては、そのような交友関係に役立ち得るのではなからうか。「石くれ会」が、そのためにいくらかの参考になれば幸いである。

「石くれ会」が成り立つたため「石」に好都合であつたいろいろな条件が考えられるなかで、まず第一にはゼミの人数が少いことが挙げられる。地学のゼミをとるものは毎年十余名であるが、これもしくラスの人数とあまり変らぬほどの多勢であつたならば、それほどの親愛感は生まれにくいであらう。

次にはゼミの運営法が挙げられる。もしゼミが補講のような形式であつて、教師は講義のときと同じように教壇の上の教師であるならば、ゼミをわざわざやる意味の大半は失われてしまう。もちろんこれは人数とも関係してくるが、

地学では学生同志の論文紹介やそれについての討論、または学生の実験を主体として、教官は側面的に援助する程度に止めてゐる。そうすることによつて自分達のゼミとしての巨魁もでき、初めは消極

の少いことである。もし職業的意識が支配的であるならば、本郷の専門過程に入つてからの交友と愛らぬわけで、同好会的なごやかさは期待できないであろう。地学のゼミを選んで、専門過程では地学と関係の薄い方面に進む人が少くないが、たとえば法科に進んだものも九日の会に喜んで参加している。そして本郷に行つてからこのようなごやかな雰囲気を楽しめる機会がないとの感想を述べていた。

「地」 学のゼミに特有の条件として、地学巡検を挙げることが出来る。旅に出れば、先生も学生も、先輩も後輩もない。たちまちにして百年の知己のようにになる。実際学校の塙の中だけでのつき合ひでは、全人格的に触れ合う機会がない。地学以外のゼミでも、たとえば休暇を利用して山や海の寮に合宿することなどは可能であらう。またそれと実行しておられるゼミもあるようである。

さて以下として、を拱いても育たなみに集つと照う。つた第二二ビスぶりの原動力

「前」 養学部のものだとしかしそつて、決ない。わ悩みの中のグルー産の手でできるのだとは自ら拓か。それ味えないである。

去 二月九日に「石くれ会」が発足した。これは

地学のゼミナールをこつたものの親睦の会である。発足にあつては、第一期のものが主として世話をやいたが、今後は各年度から二名づつの世話役を出して運営していくことになつた。九日の発会式には、本郷から第一期生も多数参加し、雑誌「石くれ」の創刊号も贈られ、なごやかな楽しい会合であつた。

「教」 養学部の生活が、その理相に反してとかく講習会式の無味乾燥なものに流れやすいことに対しては、学校側も学生側もいろいろ心配しているようであ

## 私と学生

教養学科上

学生は私にとつては「教師」であつたが、

この駒場キャンパスに、自  
然科学博物館と称する一室が  
あることは案外知られていな  
い。実のところ、これを正式  
に博物館と呼ぶには次の三点  
で内心忸怩たるものがある。  
すなわち、独立の建物ではな  
く元研究室を改造した一部屋  
を展示場とし、収蔵品は各棟  
の実験・講義準備室等に分散  
保管するというまとまりのな  
さに加えて、常時公開できる  
だけの予算措置と人の配置が  
つかず、年に一度駒場祭に相  
前後して一週間程度公開する  
以外には、特別の学会や講義  
の折に限られた人達だけが見  
学できるシステムしかとれな  
いのである。そして最後に現  
行法では大学に博物館と公称  
できる施設は置けないことに  
なっているからである。

第三の点については少しく  
説明を要しよう。わが国の博  
物館法等では、国立博物館で  
も動物園・水族館と同じく民  
間公開を前提に文部省社会教  
育局の管轄するところであ  
り、大学の属する高等教育局  
の守備範囲ではない。したが  
って本郷キャンパスにあるわ  
が国唯一のUNIVERSI  
TY MUSEUMさえも、  
英名こそ博物館ではあるが正  
称は総合研究資料館なのであ  
る。いま各大学から大学博物  
館の教育上の役割りを強調し  
その設置認可要求が出されて  
いるが、実情は図書館の一隅  
や特別室に展示・格納して研  
究教育に供している等、駒場  
と同様である。法制上のバリ  
アをこえるのは容易でなく、  
寄附行為による博物館(例・秋

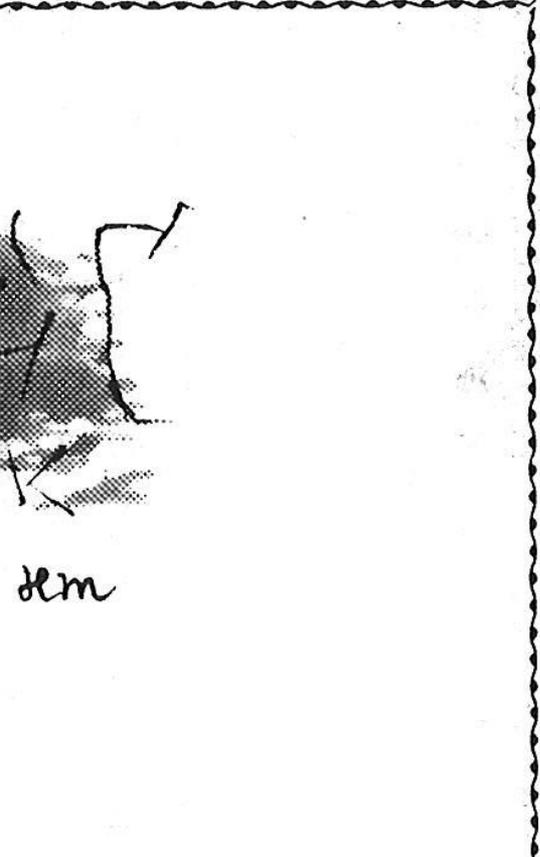
田大学鉱山博物館)を除くと  
わが国にはまだ大学博物館は  
皆無ということになる。この

# 教養学部自然科学博物館の

## 位置づけ

### 浜田 隆士

点諸外国との間に大きな格差  
があり、経済大国と呼ばれ文  
化国家をもって認じているわ



## 松浦 寿輝

(フランス語)

を禁じられた  
うだ。かずし  
せ空気をもち  
れることはで  
る墓地に  
たちもあの分



# 自然科学博物館の活動

- 発足時、学外での見学会や講演会を実施
- 1960年代 地学見学旅行  
「石くれ会」「巡検ゴロ」・・・
- 1965 秩父鉦山見学（1週間）片山教授・濱田助手・学生
- 1978 展示室の整備
- 1980年代 東大昆虫同好会の発足
- 1983 三宅島の噴火 特別展
- 1986 大島噴火 講演会
- 1987 「生きている化石」展
- 1990年代 標本の救出・移動
- 2003 改装された旧図書館に移転、駒場博物館の発足
- 以後、駒場博物館として維持存続



1998.11 展示準備







教育用標本

# 自然科学博物館と私

- 1986入学時は「幻の博物館」  
地学見学旅行に参加、「生きている化石から学ぶ」ゼミ
- 1987「生きている化石展」の展示制作に参加
- 1987生きている化石研究会(WOLF)の立ち上げに参加
- 1995, 1996と「鉱物展」の展示制作、一般公開
- 1997 大学院退学。居候に。1998からNHK学校放送に関与
- 駒場の講義棟改築・建替えに伴う標本の救出、整理
- 2001 「化石展」の展示制作、公開
- 2001より5年間、非常勤職員（技術補佐員）
- 2003 自然科学博物館の移転、駒場博物館の発足
  
- 2003 武蔵工業大学（現・東京都市大学）専任講師
- 2009 自然科学科の立ち上げ、学芸員課程設置  
現在に至る

東京大学 教養学部 自然科学博物館委員会 (宇宙地球科学)  
地学標本についてのメモ [ '95/11/19 濱田]

設置：美博と共に委員会は早くから発足

活動：

展示場を持たぬまま、一高時代の教育標本を中心に、地学教室時代の各教官が、フィールドで鋭意収集した研究用標本を加えて充実に努めてきた。activityとしては工場、鉱山、船の見学会、講演会を年2回定期的に開催。委員長は片山教授、工学の複数教授、数学の上野教授、浜田でつとめた。

収集：

地学標本のうち、教官のかかわったものの主要コレクションは  
(順不同)

片山：放射性鉱物（学振のウラン・トリウム委・委員長時代）

岩生：北欧岩石・鉱物（IGC）

インド岩石・鉱物（IGC、浜田も協力）

立見：キースラーガー他、変成岩も

地文研：秩父鉱山のコレクション

伊藤・中村他：巡検時の採集品

湊：主として粘土鉱物・ゼオライト他窯業鉱物・素材

浜田：東シナ海、セイロン、紀州などの現生サンゴ類

購入品：様々な化石等、教育用・地球大紀行時代

その他：折にふれ皆で努力した。

# 背景

- 国内の鉱山が活発に採掘を行っていた時期（1950、60年代）
  - 教養教育の一環だが、工学の視点がある
  - 巡検とセットの標本収集
  - 教員個人の研究にともなう標本の蓄積
  - 教育用に使えるものを取り分けていた形跡がある
  - 「環境／システム」の視点を入れた先駆的な試み（80年代）
  - 学生の自主的な活動の成果をとりこむ／支援
  - 大学博物館の世間的な認知（1990年代）
- 
- 教員の世代交代に伴う活動の衰退  
ものを扱わなくなる傾向







# University of Glasgow Hunterian Museum



William Hunter(1718-1783)  
のコレクションをもとに、  
1807に開館



# 現代的な意味はあるか？

- 自然史教育に「もの」は必要。
  - 博物館は、ベースとしての重要性がある
  - どうやって理解を広げていくか？
- 
- 「もの」を扱う他の領域との連携  
工学・理学の壁をなくす。  
動植物・理化学器械・考古・美術…
  - まず蓄積。

四半世紀かけて博物館を作ろう

